

リスク受容経験とベネフィット認知・リスク受容との関係

○森泉 慎吾 白井 伸之介
(大阪大学大学院人間科学研究科)

キーワード：ベネフィット認知，リスクテイキング行動，コスト

【研究の目的】リスク受容に伴うベネフィット（見返り）は意思決定に大きく影響し、見返りが大きくなるほど、リスク受容が促進されることが多くの先行研究にて指摘される。一方で、ベネフィットの主観的な評価であるベネフィット認知の影響要因に言及した研究は少ない。本論文では、リスク受容の経験に着目し、リスク受容時に経験したベネフィットの大きさが、後のリスク受容時のベネフィット認知および行動に及ぼす影響を実験的に検証する。従来の知見に従えば、ベネフィットが相対的に小さい場合よりも、ベネフィットが大きい場合にリスク受容は促進されると予想される。しかし、日常にてリスク受容を多く経験している者は実験環境でも同様にリスクを受容する傾向にあり（森泉・白井，2012），リスク受容の経験によってベネフィットの大きさとリスク受容との関係は異なる可能性がある。

【方法】実験参加者 21歳から29歳までの男女40名（男性20名，女性20名）であった。平均年齢は24.72歳（ $SD=2.07$ ）であった。参加者は、人材派遣会社を通じて募集された。参加の謝礼として、謝金3,000円が支払われた。

課題 課題は知覚判断課題（ターゲットと判断基準との一致を弁別するダミー課題；Fig. 1左）と上書き課題（「知覚判断課題の保存」と称した課題；Fig. 1右）で構成された。上書き課題には、上書き待機時間の発生（4秒/8秒）という時間的コストが伴った。上書きは省略可能であり、省略した分はまとめて上書きが可能であるが、上書きに失敗する可能性があり、その場合「失敗1回につき50円を謝金から差し引く」と虚偽の教示を行った。よって、本実験では「上書きの省略」をリスク受容、すなわちリスクテイキング行動として定義した。また、参加者が上書きした回数を把握できるように、上書き回数を画面上部に表示した。

ベネフィット条件 上書き待機時間が4秒の「ベネフィット小」条件，8秒の「ベネフィット大」条件の2水準であった。

ベネフィット条件の順序 先にベネフィット小条件を経験する「4秒→8秒」群（20名）と先にベネフィット大条件を経験する「8秒→4秒」群（20名）の2水準であった。

デザイン ベネフィット条件（小/大）×ベネフィット条件の順序（4秒→8秒/8秒→4秒）の2要因混合計画であった。

質問紙 ベネフィットに対する認知として「上書き省略にどの程度得を感じるか」について10件法にて回答を求めた。

手続き 知覚判断課題の後に上書き課題について教示し、練習試行にて上書きが実際に失敗する様子、またその発生確率を体感させた。知覚判断課題1回と上書き課題1回を合わせて1試行として、計120試行の本試行を実施した。なお、本試行では上書きに実際に失敗することは無かった。

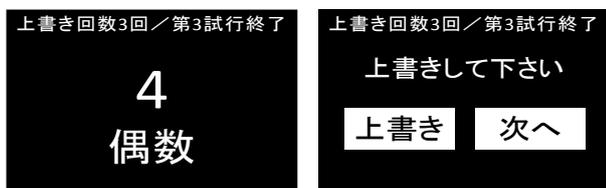


Fig. 1. 実験課題の模式図

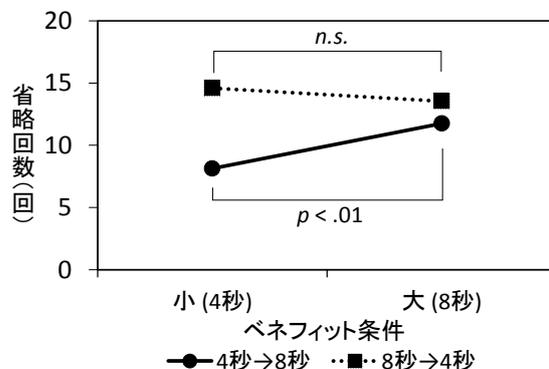


Fig. 2. 実験にて設定した各条件と省略回数との関係

【結果】分析対象者32名について、本課題での省略回数を従属変数、ベネフィット条件、ベネフィット条件の順序を独立変数とする2要因分散分析を実施した。その結果、ベネフィット条件と順序の交互作用が有意であり（ $F(1, 30) = 9.48, p < .05, \eta_p^2 = .24$ ），単純主効果の検定の結果、「4秒→8秒」条件の参加者は、ベネフィットの大きさが8秒の方が4秒に比べて省略回数が多くなる一方で（ $p < .01$ ）、「8秒→4秒」条件ではベネフィット条件間に有意な差がなかった（ $p = .34$ ）。Fig. 2. に各条件での省略回数を示す。また、ベネフィット認知得点を従属変数として同様に2要因分散分析を実施したところ、同じくベネフィット条件と順序に交互作用が有意傾向で見られ（ $F(1, 30) = 3.83, p < .10, \eta_p^2 = .11$ ），単純主効果の検定の結果、「4秒→8秒」条件の参加者は、ベネフィットの大きさが8秒の方が4秒に比べてベネフィット認知が高くなる一方で（ $p < .05$ ）、「8秒→4秒」条件ではベネフィット条件間に有意な差がなかった（ $p = .75$ ）。

【考察】本研究にて、従来の知見であるベネフィットの大きさとリスク受容の程度との相関は、先にベネフィットの相対的に小さい条件を経験した参加者にて確認された。一方で、先にベネフィットが相対的に大きい条件を経験した参加者は、後のリスク小条件におけるベネフィット（4秒）をベネフィット大条件（8秒）と同程度に認知する結果、ベネフィット大条件と同程度にリスクテイキング行動を敢行しやすいことが示唆された。換言すれば、リスク受容において、得られるベネフィットが客観的に小さいかどうかは問題ではなく、小さいベネフィットであっても、状況次第では高く認知され、結果としてリスクは受容されうることを意味する。今後は、このような認知の歪みがなぜ生じるのかについて、例えば、制御焦点理論（e.g., Higgins, 1997）といったリスク受容に対する動機づけの理論的観点から実証的に検討する必要があると考えられる。

【引用文献】森泉慎吾・白井伸之介 2012 日常でのリスク傾向と違反行動との関連について 交通科学, 43 (2), 38-45.

Higgins, E. T. 1997 “Beyond Pleasure and Pain”, *American Psychologist*, 52 (12), 1280-1300.

(もりいずみ しんご・うすい しんのすけ)